

はしがき

東日本大震災から一年が経とうとしている。政治の無力は覆いがたい。「復興」のかけ声の裏で、仮設住宅で自ら命を絶つ人が相次いでいる。亡くなった親しい人への思いを一人で抱え込んで、それを言葉として吐き出してはいけなさと自分に命ずるように、じつと耐え、声を上げずに泣いている人たちがいる。誰にも頼らずに、誰にも知られずに、そして誰かに知らせようともせず、心を震わせ、身もだえしている人がいる。言葉にすることは、言葉が人から還ってこないとき、大切な、親しい人の全き感じを自ら捨て去ることに等しい。だから、人は、言葉にしない。一番大事なことを。自分を抱擁してくれる人がいないところでは。

「お前ら、いまさらなにしに来たんだ。」過疎地のリーダーたちは、頑として口をつぐんだままだ。無理やり上がり込み、じつと耳を傾ける。彼らが重い口を開き、訥々と語り始めるのは、地区の過疎化の歴史であり、故郷を捨てた自分を責める言葉であり、子どもたちを都会へと送り出さざるを得なかった無念さであり、そしてそういう自分を慰めないではいけないかのように絞り出される「仕方がないじゃないか」という言葉だ。その後に口をついて出てくるのは、「あんたらに来てもらっても、もう、何もしてやれん」という言葉であり、そこでぐっと呑み込まれるのは、「すまんな」と誰に宛てたのでもない独り言だ。それでも粘っていると、最後の最後に出てくるのは、「あんた、かかわった以上、最後までやってくれるか。このままじゃあ、どうにも気持ち収まらん」。地元リーダーたちは、悲しみながら怒っていたのだ。自分に、そしてこの社会に。

谷川俊太郎に「うつむく青年」という詩がある。うつむくことで「私」と「私」が所属する世界を拒否する「青年」は、うつむくことで生への一步を踏み出していく。なぜなら、「私」と世界とがなにをするのでもなく、ただ、彼を受け入れ、抱擁しているからだ。彼はその身体を拒否しはしない。

言葉は、人と人との間に置かれるのではないとき、無力なだけでなく、人を苛み、苦しめる。ひとたび言葉が人との間にひらかれるとき、人はその身体をひらいていくようになる。人が人にひらかれ、つながり、まわり、そしてつくりだしていく。生活を、文化を、経済を、そして社会を。

大きな社会をつくり直すために、小さな生活の場で、人が人とつながろうとする意志に支えられて、共に生きようとすることで、自分を社会にいかしていく営み。私たちは、もう一度、この最も基本的なことから、やり直すことを求められているのではないか。そして、そこから、自分と社会とのあるべき関係をつくりだすことをとおして、言葉が人にひらかれ、大事なことが人との間で語られる社会をつくりだす営み、つまり政治に参画することが求められている。生涯学習は、社会をつくりだす営みの基礎となるべきものである。本書がそのための一つの試みとなれば、と思う。

本書の出版には、大学教育出版の佐藤守さん、安田愛さんにお力添えをいただいた。感謝申し上げます。ありがとうございます。

二〇一二年三月八日

人が生きる社会と生涯学習
—弱くある私たちが結びつくこと—

目
次

はしがき..... i

序章 生きるに値する〈社会〉のために..... 1

第I部 生涯学習を課題化する社会..... 15

第一章 生活様式の変容と生涯学習の課題..... 16

一、社会の変容と人々の生活 16

(一) 少子高齢社会の現実 16

(二) 低成長・マイナス成長経済の社会と生活の変容 17

(三) 自殺者統計の示すもの 19

二、グローバルゼーションと中間集団の解体 22

(一) グローバリゼーションと国民国家⇨福祉国家の解体 22

(二) 中間集団の崩壊と帰属による人々の社会的意味の不全化 24

三、ローカルの知と社会教育・生涯学習の課題 26

(一) 新しい自我像の必要 26

(二) 地縁技術とローカルの知 29

(三) 生涯学習の新しい課題へ 31

第二章 自治体の再編と生涯学習………

一、一部大都市への人口集中	34
二、基礎自治体の疲弊と自治組織の解体	37
(一) 町村合併の歴史	37
(二) 基層自治組織と利益誘導・分配の政治	38
(三) 不利益分配の政治へ―「平成の大合併」の性格―	40
三、基礎自治体疲弊のメカニズム	41
(一) 地域資源の枯渇	41
(二) 農山村疲弊のメカニズム	43
(三) 生きるに値する〈社会〉の創造を	45
四、均質化と「社会」の課題化	46
(一) 学校と戸籍―均質空間と規律・訓練―	46
(二) 社会教育と〈わたしたち〉の広汎な成立	48
(三) 町内会の生成・普及と国家の普遍化	50
五、社会の裂け目と社会教育	52
(一) 〈わたしたち〉の仮構の動揺	52
(二) 均質性と序列性のダイナミズム	53
六、システムからプロセスへ	54
(一) 近代産業国家のダイナミズムの不全化	54
(二) 生涯学習による多様なアクター育成と自治体再編	56

第三章 「無償」無上の贈与」としての生涯学習——または、社会の人的インフラストラクチャーとしての生涯学習——

- (三) 静的システムから動的プロセスへ——生涯学習の課題—— 58
- 一、生涯学習をどうとらえるか 61
 - (一) 実践の形式という枠組み 61
 - (二) 「商品」としての教育・学習の陥穽 63
 - (三) 私的であることが公的である枠組みへ 66
- 二、大学における市民への授業公開プログラム 67
 - (一) プログラムの概要と受講動機・受講後の感想 67
 - (二) 自分の変化について 69
 - (三) 大学の社会貢献について 71
 - (四) 本プログラムから見られる市民の意識 72
- 三、高齢者世代の価値観 74
 - (一) 「つながり」への希求 74
 - (二) 高齢者の関心事の構造 75
 - (三) 結びついていること 79
 - (四) 「自己の永遠化」へ 80
- 四、「無償」無上の贈与」としての生涯学習と知識の社会循環へ 81
 - (一) 学びの過剰性という「態度」 81

- (二) 学びの過剰性と私たちの自我 82
- (三) 社会のインフラストラクチャーとしての生涯学習 83

第四章 「働くこと」の生涯学習へ……………85

一、雇用劣化社会の問題 85

- (一) 雇用不安の時代 85
- (二) 正規から非正規へ―雇用構造の転換― 87

- (三) 職能給・成果主義の導入 89

- (四) 「働くこと」の誇りの剥奪 91

- (五) 「働くこと」を問う社会へ 93

二、「働くこと」を問い返す 95

- (一) ニート・フリーターをめぐる諸論調 95

- (二) 「人と比べてマシな自分を見つけようと死にも狂い」の若者たち 98

- (三) 「みんな」の解体と「地元つながり」に生きる若者 100

- (四) 正規でも非正規でもなく―「働くこと」を改めて問う― 101

三、「働くこと」を支援する―「中高年者のための人生・キャリア再設計セミナー」の試み― 103

- (一) 社会で「働くこと」を問い返す 103

- (二) プログラムの概要 104

- (三) 受講者の動機 106

- (四) 受講後の変化 107

四、「働くこと」の生涯学習へ	110
(一) 「政治災害」としての雇用劣化	110
(二) 「自立した強い個人」でなければならぬか	111
(三) 平凡な弱い個人が職業生活を営むために	115
(四) 「働くこと」とフロー化する学び	116

第Ⅱ部 自治組織再編と生涯学習……………121

第五章 地元社会の再編と生涯学習の課題―愛知県豊田市の合併町村地区を一例に―……………122

一、豊田市合併町村地区の課題を考える基本的枠組み	122
(一) 豊田市合併のモチーフ	122
(二) 分権型都市への模索と生涯学習	123
二、豊田市の抱える課題	126
(一) 広がる地域間の格差―合併以前から抱える問題―	126
(二) 過疎・高齢化と行政の疎遠化―合併後の新たな問題―	129
(三) 自治組織の機能不全と自治区長・民生委員の負担増、生活格差の拡大	131
(四) 地域類型と自治組織の特質・課題	133
三、合併町村地区の概況	136
(一) 人口・世帯状況	136

第六章	住民自治組織の再編と公民館の役割——長野県飯田市の改革を一例に——	149
一、	基本的課題	149
(一)	飯田市公民館への着目	149
(二)	地域自治組織導入の試み	150
(三)	新たな〈社会〉の生成と公民館	152
二、	飯田市公民館制度の特徴	153
(一)	公民館の位置づけ	153
(二)	公民館主事の「専門性」と地域社会	155
(三)	地域社会の変容・可能性	157
三、	飯田市の再編と公民館の課題	159
(一)	飯田市再編の構想	159
(二)	「人材サイクル」構想と公民館	161
(三)	公民館の直面する課題	166
四、	飯田市自治組織の構成と公民館の役割	169
(一)	産業の状況	139
(二)	地域の間関係	143
(三)	文化的中心の喪失	144
(四)	合併町村地区をとらえる視点	145
(五)	自治体合併と生涯学習の新たな課題	146

第Ⅲ部 生きるに値する社会への試み……………181

- (一) 「開かれた自立性」と公民館 169
- (二) 新たな社会的アクターの育成と公民館 171
- (三) 学習による人々の循環と公民館 172
- (四) 公民館の新たな位置づけと役割 174
- (五) 公民館主事と分館活動の拡充を 177

第七章 過疎・高齢化中山間地域再生の試み―豊田市過疎地域対策事業「日本再発進！若者よ田舎をめ

ざそう」プロジェクトの構想と第一年目の報告……………182

- 一、本プロジェクトの基本的な考え方 182
 - (一) プロジェクトの背景 182
 - (二) 基本的課題の設定 184
 - (三) 過疎化の原因と要因 187
 - (四) 住民の可能性 191
 - (五) 外部環境のもたらす優位性と脆弱性 193
 - (六) 考えるべき視点 193
 - (七) 基本的イメージ(施策) 196
 - (八) 当面の具体的事業 201

二、本プロジェクトのイメージと構想	205
(一) 基本的イメージ	205
(二) 本プロジェクトの構成領域	206
三、本プロジェクト第一年目の経過と成果・課題	211
(一) 実施地区の概要	211
(二) プロジェクトの概要	213
(三) 本プロジェクトの特徴	231
第八章 多世代交流型オープン・ケア・コミュニティの構想―愛知県豊田市・千葉県柏市への調査より―	
一、本調査の概要	237
(一) 調査の背景	237
(二) 調査の目標	239
(三) 調査の内容と概要	239
二、調査結果	242
(一) 豊田市高橋地区	242
(二) 柏市風早南部地域高柳地区	248
(三) 医療関係者への聞き取り	254
(四) 強い危機感と高い潜在力、手法の開発を	255
三、研究開発プロジェクト案	257

第九章 地域コミュニティの人的ネットワーク再構築の試み―千葉県柏市高柳地区「柏くるるセミナー」

の実験――	261
一、事業の概要	261
(一) 本事業の背景	261
(二) 本事業の考え方	264
(三) セミナーの設計	267
(四) セミナーのプログラム	267
(五) 告知と募集方法	268
二、応募者の受講動機・講座への期待および価値観	269
(一) 受講者の属性	269
(二) セミナーの受講動機	272
三、受講の様子と受講後の変化	279
(一) 受講の様子	279
(二) セミナーで実現できたことと自己評価の高まり	279
(三) セミナーへの評価	286
(四) プロジェクトの生成過程	258
(五) 成果の利用	260
(六) 研究開発プロジェクト案のポイント	257
(七) 研究開発プロジェクトテーマ	257

四、柏くるるの効果と今後の展望	290
終章 「弱くあること」を認め合う社会への自問	293
初出一覧	300

